編集部が迫る！

発達保障ってなんですか？

秦 安雄さん 下

はた　やすお

1931年愛知県生まれ。名古屋大学教育学部・同大学院で学ぶ。日本福祉大学名誉教授。専門は教育心理学・障害者福祉論。ゆたか共同作業所づくりにかかわり、ゆたか福祉会理事長などを歴任。現在、全障研顧問。

労働をつうじて発達する

発達というときに、多くは児童が念頭にありますが、共同作業所ができてくると、知的障害のある人たちが働くことをつうじて発達していくことを感じ始めました。ただたんに働くことだけでなく、労働とは何かということも同時に追求され出しました。

知的障害者が物を生産すると同時に労働をすることで人間的に発達していくことがめざされました。資本主義のもとでは、どうしても強制労働や労働疎外という現象は起こります。だからこそ障害のある人の労働のあり方をつうじて、人間性ゆたかに発達していく労働が可能になる社会の仕組みを追究したいと思いました。

発達は「グッドウィル」のころから念頭にありました。働く場ができることによって、実際に働く力を獲得して発達していく姿をみました。全障研の発達権保障の運動に参加して、理論が実践をつうじて確認されていくことを大切にしてきたし、労働というものの考え方を私たち自身が学び、考えさせられました。

集団労働をめざして

仕事が強制的に何かをやらされているのではなくて、自分たちで主体的に一生懸命やろうとか、こんなものをつくろうという気持ちが出てくるような働く場の集団をどう組織するかを考えてきました。

隣の人の手伝いをしたり、サボったりしていると注意したり、ただ人が集まってバラバラに仕事をするのではなく、お互いに協力し、助け合いながら働くという組織された集団労働として展開していくようなあり方をめざしました。

集団労働のなかでは、数を数えられる人と数えられない人がいると、数えられる人が支えるだけでなく、ある子は自分が数を数えられないから数えられるようになりたいと、勉強を始めるという意欲が出てきました。そうした気持ちにさせる集団の雰囲気がありました。そこには、知的障害があっても生産する集団の目的や価値をきちっとそれなりに感じていたことがあったのだと思います。

＊

労働をつうじて発達を保障しようとするゆたか共同作業所では、みんな表情が明るかったです。別の施設からきた仲間の一人は、当初、人に会うと身がまえ、防衛するような仕草をします。ゆたかにくるまでは、叩かれることが多かったのです。その人も働くなかで表情が豊かになっていきます。そんな魅力がゆたか共同作業所の集団労働にはありました。

初期は比較的軽度の知的障害の人が中心でしたが、それがだんだんと重度の障害の人が入るようになりました。実践がつみあがっていくことによって、それがまた広がっていく流れができました。

「労働苦」の現代

いまは作業所も現行の制度でがんじがらめになっています。以前は、措置費で自由に実践をやれたけれども、いまは細かく点数を数えないとお金がおりてこなくなっています。実務的なことがずいぶんあって、ちゃんと障害のある人とかかわる実践がむずかしくなっているようです。

そんな状況では、労働がいきいきするものではなくなっていきます。現代の社会では、働くことは苦しいという「労働苦」になっていて、極力、労働時間を少なくしたいという思いもでてきます。それは、労働力を会社に売り、会社のための仕事をやっているからで、自分のための仕事ではないからです。使用者と被使用者という関係があり、生活を維持していくため、賃金のために苦しくても働くということになります。

資本主義になるずっと前は、労働は誰かに働かされているのではなく、自給自足のような自分のための労働をしていました。いまは、雇用関係のなかで会社の儲けのために働くことと自分のために働くことの矛盾があります。そのなかでどう働くかが問われています。

働く意味を考えながら

ゆたか福祉会では、身体障害者の作業所では月額どれくらいのお金があったら障害者が生活できるかを考えて、できるかぎりの給料を出すようにしていました。それでも、ほとんどは生活できるような給料ではないので、年金と足してある程度の自立できるような生活目標を立てていました。所得や生活保障のために、今もそうした努力は続けられています。

そして、それと同時に、ゆたかでは労働教育もやっていて、何のために誰のために働いているのか、働くことが社会的にどういう意味をもつのかをいろいろと意味づけて、考えられるような実践をつみあげてきました。

理屈でわからなくても、働くことをつうじてそれなりに自分たちなりの働く意味や考えをつくっていたと思います。そこには先ほど述べた集団労働があり、ある目的があって、その目的を追求するための集団があるから、何のためにやっているかという自覚がつくられたのだと思います。

ゆたかの実践は、先に教科書か何かがあって、それに従ってやったというわけではなく、日々の仲間の姿をみていくなかで、その発展としてありました。実際に障害のある人とかかわり、全障研の発達権保障運動のなかで労働を保障し、考えて学びながらやってきました。

現場での魅力をみつける

日本福祉大学の卒業生の多くもゆたか福祉会に就職したり、各地の作業所づくり運動を担ったりしていきました。職員になってから全障研に参加していく人もいました。

養護学校が義務制になった頃、教員の採用が多かったから日福大の卒業生は、教育大学の卒業生が敬遠していた養護学校に、みんな喜んで就職していきました。一般企業に就職することに気が引けるような時期もありました。それは、時代の流れもありますが、福祉的現場に魅力があったことが大きかったと思います。仕事は魅力的だからこそ続けられますからね。

いまは、どの現場でも忙しさにかまけて、日々が過ぎていくことがあると思います。そんなときでも、理想的ですが、現場の労働をとおして人間的にも豊かに成長していけるような働き方を大切にしてほしいですね。

私の研究は、もともとの教育心理学から、いつのまにか障害児教育になり、障害者福祉になって心理学から離れてしまいましたが、人間の発達という視点はずっと根っこにありました。それを追求できたのは、やはり発達権を保障することをめざす全障研が組織されて仲間たちがいるということが一番の力になりました。現場でもそうした仲間をつくり広げてほしいと思います。

そして、これから福祉や教育の現場に出ていく若い人たちへ伝えたいことは、子どもや障害のある人たちのなかに気兼ねなく飛び込んでいってほしいということです。子どもたちでいえば、おっかなびっくりではなく一緒に遊んだらいいのです。どうしていいかわからなくなることが、たくさんあるかもしれませんが、思いきって飛び込んでなかよくなることから始めてほしいですね。

▶第3回成人期障害者の発達を考える交流セミナーでの講演（1989年）

▶『みんなのねがい』400号記念のつどいにて（2001年）